

今秋から広域かつ大規模な事業展開 「緑の大地計画」の仕上げ——ミラーン堰対岸工事と研修所の設立

PMS（平和医療団・日本）総院長／ペシヤワール会現地代表 中村 哲

皆さん、お疲れさまです。

今年とは異例に長い夏の帰国で、暑い暑いと言っているうちに、秋になりました。やっと現場に戻れますが、日本列島の気候も、ずいぶん以前と変わってきていることを思い知りました。熊本地震に次いで、集中豪雨、一転して極端な少雨、大型台風、河川の氾濫と、まるで現地アフガニスタンの大自然を見るような思いでした。温暖化をめぐり、少しずつ私たちの訴えが理解されるようになってきていると思いました。

ミラーン堰と対岸の工事

さて、今秋から今冬にかけての工事は、例年以上に広域にわたって行われます。今秋は、ミラーン堰の仕上げに区切りをつけ、その対岸、コーティ、タラーン、ベラ、カ

チャレイの村々で、八・六kmにわたる大規模な護岸工事が始まり、最上流では取水堰の建設が行われます（5ページ図参照）。

この工事は各方面とも協力して、四年がかりで行われます。「緑の大地計画」の仕上げであると同時に、その後の広域展開に向け、人員養成を行うことに、大きな意義があります。

また、これまで近づけなかった対岸（クナル河左岸）のベルト地帯全域が作業地に入り、カシコートからカマ地域まで、クナル河沿い約三〇km、両岸から自在にアプローチできます。両岸からの作業は日本では当然ですが、今まで両岸の仲が悪く、片側だけから無理な工事を進めることが多かったのです。これで河川工事や取水堰建設が非常に円滑に行われることになりま



クナル河左岸（ミラーン堰上流対岸）の洪水流入路の護岸堤2.4km。今秋この上流にマルワリード第二堰の建設が開始される

は更に重要です。実は建設だけでなく、むしろ維持改修の方が根気も努力も要るからです。次に述べる研修所で、この点を実地に学ぶことを主眼の一つとしています。

研修所の準備

研修所の設立も、大きな課題です。今秋にはFAO（国連食料農業機関）やナンガラハル州の地域行政とも協力し、将来に向けて建築が始まります。しかし、大切な



2003年マルワリード用水路建設開始から長年共に働いている職員及び作業員たち。ミラーン土砂吐き建設現場（2015年10月末）



マルワリード堰。対岸カシコート堰と連続し505m。両堰とも取水量は安定している（2016年8月24日）



今夏の洪水で移動して来た砂州。バスード第一堰上流。秋から堰と共に改修工事を開始する

は中身です。

当方では、先ずPMS職員を「現場の先生」として更に訓練し、次第に他地域の人々を受け入れていく方針を採っています。これまで、地域参加が徹底しないと無責任に流れやすく、根づかないという、過去の苦い体験があるからです。

もう一つの特徴は、徹底した現場での訓練です。技術者は往々にして、頭の中で卒業してしまい、設計図と測量だけで全てで

きると錯覚しがちです。取水設備の構造は一時間で学べますが、実際に作るのには五年かかります。現場で働ける者を増やすことがカギになります。PMSは研修所を「実働部隊の養成所」と位置づけ、時間をかけて築きたいと考えています。

既設の取水堰の改修

PMSはこれまで、クナール河沿いに八カ所、カブール河本川に一カ所、取水堰を

建設しました。しかし、年々改良され、最近のカシコート連続堰、ミラーン堰が最善のものとなっています。

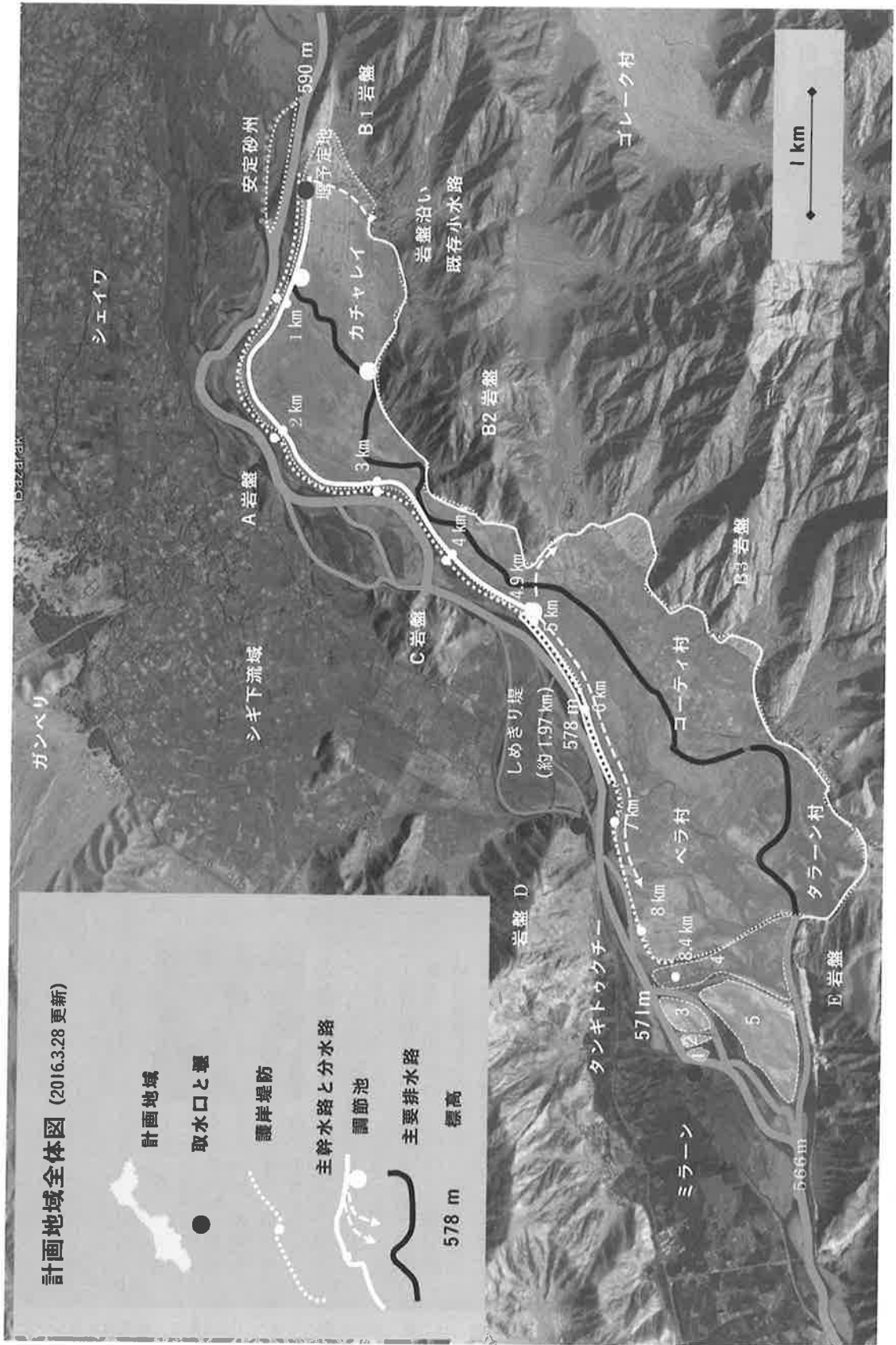
現在問題となっているのが河道変化、砂利堆積、砂州移動です。クナール河のような急流河川では運命的なものです。取水堰前後の河道が安定しないと、安定した取水ができません。二〇一六年度を皮切りに、ひとつひとつ改修を施し、耐久性のあるものにしていく予定です。



ひと夏の洪水を経たミラーン堰。堰や河道、砂州の観察後、秋より改修工事が開始される（2016年8月30日）



ミラーン堰上流対岸の旧取水路と消滅した農地。小規模ではあっても、このように、洪水流入後荒廃する農地が絶えなかった。しめきり堤2.4km地点（2016年7月）



マルワリード用水路II計画地域全体図 (2016年10月より着工予定)



グリーンチリを収穫中の家族（ミラーン村、2016年8月）

二〇一六年・秋の陣

こうして今秋と今冬は、ミラーン堰を仕上げて区切りをつけ、対岸に主力を集中、その最上流で取水堰（マルワリードⅡ）の造成を開始します。

同時並行でベスト第Ⅰ堰とカマ第Ⅱ堰の改修を行い、ガンベリ排水路網の整備、PMS農場の開墾はペースを落とさずに進められます。おそらく今冬が、今までにな

く広域、かつ大規模なものとなります。

*

アフガン報復空爆から一五年、「緑の大地計画」が始まって一三年が経ちました。

この間、対テロ戦争、内戦の泥沼化、アラブの春、民主化運動とその挫折、欧米主要都市での爆破事件、危険情報の氾濫、過激組織の世界拡大、……もう、まっぴらです。「テロとの戦い」を声高に叫ぶほどに、犠

牲者が増えました。そして、その犠牲は、拳をあげて戦を語る者たちではなく、もの言わぬ無名の人々にのしかかりました。干ばつに斃れ、空爆にさらされ、戦場に傭兵として命を落とす——アフガン農民たちの膨大な犠牲は、今後も語られることはないでしょう。

私たちは、このような人々にこそ恩恵が与えられるべきだとの方針を崩さず、現在に至っています。多くの良心的な人々の支持を得て、事業は着実に進められてきました。PMSは、誰とも敵対せず、仕事を進めて参ります。

際限のない話ですが、決して賽の河原ではありません。長年の努力によって、次の飛躍に向けて、確実に見通しを得ようとしているからです。これまでのご厚意に感謝し、事業が氷河の水の尽きるまで継続され

ることを祈ります。

平成二八年九月一五日 記



中村 哲：九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、

一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百カ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通した。ドラエヌール診療所の年間診療数四万二七二二人（二〇一五年度）。